

Title	学外からのSPSSXの利用について
Author(s)	家本, 修
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1990, 76, p. 69-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65870
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

学外からのSPSS Xの利用について

梅花短期大学 家本 修

1. はじめに

本センターの利用の中で処理件数としては、アプリケーション・パッケージとくにSPSS関係のバッチ処理が大きな比率を占めている。また、SPSSのユーザの多くは、センター来訪だけでなく学内外からの回線経由の利用が増えている。この実態は、プログラム相談の内容がプライマリな相談が姿を消し、プログラムの適合性から分析内容に至るまで、研究の内容に踏み込まざるを得ないことがある。これがプログラム相談の範疇かどうかは別にして、多変量解析を行う場合の必要な部分であろうと理解している。しかし電話でこの種の相談が増えてきたのは、エラー箇所を指摘する訳でないので少々不都合と思われるが、これもセンター外での利用者が増えてきた現象であろうか。

しかし、まだまだパソコン並に、いやそれ以上に精度良く、簡単に、幅広く多数のデータが加工、処理できるということが浸透していない。パソコンでの多変量解析がまだ十分な精度と容量が得られるかどうかと、高価格であることを考えれば、やはり大型機を利用せざるを得ないであろう。パソコン系のアプリケーション・プログラムでも、ある程度の精度が保証されているものもあるが、不安定なものが多い。また、多変量解析ではそれなりの結果が得られることがあるので、研究上では信頼性の低いプログラムは使用しない方が好ましいと考える。まして、信頼度のある高価格のプログラムを購入するよりは、センターの利用価格の方が、合理的と思えるし、一方では、低価格の信頼度の高いプログラムの出現が期待されよう。

そこで、本稿では、モデムを使って学外からパソコンを端末にを使って、パソコン上でのデータ加工やデータ・エントリーから、センターと接続して処理、また、パソコンでのアウトプットの加工、出力の事例を紹介したい。

2. 学外からの利用事例

SPSSXを公衆回線（電話回線）を経由して、パソコンを端末にして利用している事例を紹介しよう。現在、一般的に公衆回線では、2400BPSのモデムが使用でき、専用回線はともかく、一昔前の200～300ボーのカプラーの事を思えば、格段に早くなっており、イライラせずにはすむ。

2. 1 紹介事例の機器構成

パソコン本体は、NEC9801RA5であり、PC-PR201Vのプリンターとアイワのフルデュプレックス（全二重）の2400BPSのモデムを使用している。通信ユーティリティは、センター提供のASTERを使用し、データの送受信には、フロピィーディスクを使用し、ハードディスクはアクセスさせていない。また、メモリも640KB以内なので、9801系なら殆ど同じ構成で可能であろう。モデム代は、安いの搜したこともあって回線の工事費（既存回線を利用）を含めて5万円弱であった。ただ、通信・スクリーンエディタとしてセンターが、同じく無償で提供しているMIEDITは、この回線速度では、ターン・アラウンド・タイムが長く使用に耐えなかった。

しかし、SPSSXの場合は、編集や入力、作成は、接続前にパソコンのスクリーン・エディタで済みますので、ライン・エディタでも苦痛でない。パソコンでのスクリーン・エディタは、マイフェス（メガソフト社）を使用しているが、ASTERならMS-DOSのソフトなら日本語ワープロ・プログラムであろうが、フロント・プロセッサがあれば何を使用してもほぼ同じように使用できるであろう。ただし、ワープロ・プログラムを用ずる場合は、半角英数入力を基本にすると無難である。

2. 2 実際の利用手順

2. 2. 1 データ入力とJCL・プログラムの作成

パソコンのマイフェスを立ち上げ、まずデータの入力を始める。普通は、調査用紙から、コーディング・シートに転記して、コーディング・シートを見ながら入力するが、調査数や項目数がそれ程、多くない場合は直接入力しても差し障りはないだろう。パソコンでのキー入力は、転記したり、OCRに記入することを考えると入力速度も早く、賚やす労力や時間の大幅な節約が期待できる。また、作業ステップが削減できるので、ミスの発生も減少するだろう。

データの入力作業が終了すると、フロピィにセーブ（保存）するが、一度に5000人・100項目程度のデータでも、対応は可能である。ただし、ワープロを使っている場合は、少し容量が減少する。パソコンであるので、使いたい時に、使える時間に徐々に入力作業を進めていけば良い。次にJCLとプログラムを入力する。データ・チェックは、スクリーン上でもよいが、一度プリント・アウトする方が作業がやり易い。入力が終わると、これも別名でフロピィにセーブして、スクリーン・エディタを終了させる。

2. 2. 2 接続とセンターへデータ転送と処理

モデムの電源を入れ、パソコン側ではASTERを立ち上げる。オート・ダイヤルイの後、センター側からの通信速度を選択し、センターと接続が可能になる（ログオン）。ID番号、パスワードを入力後、ファイルを転送コマンドによって、作成したデータをセンターに送る。センター側では、カレントに送られるので、パーマネント・ファイルにセーブする。続いて、JCLとプログラムのファイルを同様に転送し、別のパーマネント・ファイルにセーブする。そして、そのままカードイン・システムで実行させる。

2. 2. 3 結果の保存と端末側への転送と編集

結果がよかったら、JOUT・システムのCOPY・コマンドでパーマネント・ファイルにセーブし、ディマンドはRELEしておく。次に、パーマネント・ファイルからカレントに結果をロードし、転送コマンドを使って端末側にあるフロッピィに直接送り込む。結果を保存してあるパーマネント・ファイルがもう不用であれば、RELEコマンドで結果を保存していたファイルごと削除し、BYEコマンドで端末を切りはなす（ログオフ）。モデム電源をオフの後で、リセットしマイフェスを立ち上げ、フロッピィから結果を読み込む。

結果の中で、不用なところをスクリーン・エディタによって削除する。項目名や図表名を漢字で入力し、見易くなるように編集をおこなう。また、他のアプリケーション・プログラムを併用することによってグラフ化も可能であり、かなり合理的な編集ができる。編集終了後、プリント・アウトし、完了。そのまま、図表に貼り込めるものの作成もでき、かなり便利である。

3. 端末としての意味

SPSSを始めアプリケーション・プログラム・ユーザにとっても、分析結果が欲しい場所で、欲しい時間に、信頼度の高い状態で自由に手に入れることが、もっとも欲していることであろう。また、現在の使い方でも、結果を受け取ってから、再加工がかなり簡単にできる。このパソコンのアプリケーション・プログラム・ユーザにとってコミュニケーションの良さが利用でき、機能分担からセンターを考えることもできよう。しかし、多量のデータ加工のためにプログラムを作って実行したり、特殊端末などの利用などセンターの機能をフルに使うことも多い。分析するものにとってアプリケーション・プログラムはあくまでツールである。よいツールを使える環境にしておくのが第1歩であり、時間の節約と生産性の向上につながるものと考えられる。

4. おわりに

公衆回線を使ってパソコンを端末として使った場合のメリットは、以下のようになると考えられる。

- ① 公衆回線を使った学外からのセンター利用は、端末側にASTERを使い、MS-DOSを使うことによって、他のパソコンのアプリケーション・プログラムとのデータ交換が可能である。
- ② パソコン側でデータの入力やディバックができ、パソコンの簡便性を使うことができる。
- ③ パソコンでのアプリケーション・プログラムを購入するよりは、経済的であり、合理的でもある。
- ④ 大量の出力や、特殊な入出力に対応できる。
- ⑤ 操作性もよく、パソコン比較しても、さほど困難ではない。
- ⑥ データ量の制限や変数の制限で、パソコンに比べ余裕がある。
- ⑦ 結果の信頼性が高いと考えられる。

などが上げられる。